

患者病侯水いまい出すもう

紛争解決後に来るもの

危険海域近く設定

来月にも汚染を調査

水俣病の原因についてはすでに熊大特別研究班の研究で、ほぼ海水中の水銀を摂取した魚介類を食べるためおこる中毒症であることが明らかにされており、水俣湾内であつた魚介類を食べないことが病発を防ぐ決め手となつてゐる。しかし現実には今年に入つてから水俣川河口近で二人の新患者が出たほか、熊本方面でもネコが死に北上の気配を示しているといわれ、南にあたる出水、米ノ津方面、獅子島、長島でもネコが同じ症状で死んでおり、これは湾内の魚が湾外へも回遊するほか、湾口付近ではいぜん他地区からの船が操業しているためだともみられている。

このため県では熊大の調査と並行して環境衛生課を中心に汚染海域を調査し、危険海域を認定する方針で、すでに要求中の原因究明費六百六十九万円のほかに汚染海域調査費を組み、九月県議会をまつて実施に乗り出すこととしてい

る。

これに先立ち熊大理学部ではすでに水俣湾内の水銀濃度を調査しているがそれによると、工場排水口付近の泥土にはすでに回収しても十分採算がとれる程度の水銀があるほか、排水口から遠くなるほど水銀含有量が少なくなり、海水の塩濃度が水銀含有量と全く一致していることもわかつてゐる。また同医学部がネコを使って行なつた実験でも、排水口付近で採集した魚を食べたネコの五三%が二十日以内に発病し、月浦、明神崎、梅戸、丸島、水俣川尻にいたネコイン内の魚では六十日以内に四四%が発病している。また湯室から、赤路島をすっぽりつつむ海域内の魚介類では九十日以内、茂道沖付近では百二十日以内に発病したことが明らかにされている。

外へ回遊するうえ、湾内の有毒物質は降雨によるかくらんや湖の干満の差で湾外へも少しずつ運び出されておき、これが島の瀬戸から流入する強い潮流のつて、以北の海岸一帯を汚染するのではないかと心配されている。したがつて、湾内に有毒物質の入り、安心できないわけ、県でも一日も早く、正確な汚染海域を調べあげ、危険海域を脱け、しゅんせつその他の手を打たねばならないわけで、患者への補償救済と相まって、今後の焦点となるものと思われ。